

HIMALAYA

ヒマラヤ

No.310



1997 SEPTEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

HAJ 30周年記念行事資金協力をお願い

HAJは、1967年10月に創立され、緒先輩達の努力により本年、30周年を迎えることになりました。これを機会に記念の幾つかの行事を行うこととなりました。概要は下記のとおりであります。執行部としましては、これらの行事にかかる費用につきまして、極力外部資金の導入などを計って賄う予定であります。会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

記

1. お願いする金額：一口 1万円

* 機関誌「ヒマラヤ」誌上に氏名・口数を公表します。(匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。)

2. 記念行事の概要：

1) 式典関係：

式典：1998年1月25日(日)(300名程度を予定)

午前：日本人ヒマラヤニストによるパネ

ルデスカッション

午後：ネパール、インド、パキスタン、中国から登山関係者を招請し、それぞれの国の登山環境の現状と問題点について講演をお願いする。

夜間：記念祝賀会

2) 出版関係：

- 1. HAJ 30年間の行動記録： 500部
- 2. ヒマラヤ日本隊のまとめ： 500部
- 3. ヒマラヤ日本隊遭難事故事例集：1000部
- 4. 機関誌「ヒマラヤ」総索引： 200部

3) 野外関係：

それぞれのヒマラヤ諸国で行われる行事にあわせて臨時派遣。

4) 写真展：

会員からヒマラヤの「この一枚」を募集し、展示する。

表紙写真

チベット登山協会とのクーラ・カンリⅡ峰合同登山を終えて帰路に着いた。ロザン・チューの流れに別れを告げ、モンダ・ラに辿り着き振り返ると、五月晴れのヒマラヤン・ブルーの空の中にクーラ・カンリ山群の雄姿がとび込んできた。写真は、右からⅠ峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰である。今回のルートはⅡ、Ⅲ間のコルに登る予定であった。

(山森 欣一)

ヒマラヤ No.310

1. クーラ・カンリⅡ(7,418m)北面報告

16. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・インフォメーション・ヒマラヤから〉

19. 投稿 54歳からのヒマラヤ行

—ど素人のヒマラヤ登山10年記—

江尻 健二

21. 中国領ヒマラヤの登れる主な山々

23. 八千メートル峰 最年少サミッターの誕生

24. 寸感・事務局日誌

クーラ・カンリⅡ (7,418m) 北面報告

一日中友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山の記録ー

はじめに

◆友情の花開く

1995年4月、チベットから一通の手紙が舞い込んだ。差出人は、1987年にH A Jとチベット登山協会が、当時としては未踏峰の世界第五位にランクされていたラブチェ・カン峰(7,367m)に合同で登山し、初登頂に成功した時の隊長チャン・テンリャンであった。その時の日本側の隊長は、私であった。内容は近況報告であったが、その中に彼の希望として、もう一度H A Jと合同登山をしたい、と書かれていた。その候補の一つに、ネパール国境にあるヤンラ・カンリ峰(ガネッシュ・ヒマールⅠ 7,429m)が上げられており、4月にはチャン自身が偵察に行くとも書かれていた。

H A Jとチベット登山協会は、86年末に当時未踏の最高峰であったナムチャ・バルワ(7,782m)登山の議定書を交わしたが、中央の理解が得られず実現しなかった経緯があった。(この経緯については91年1月にH A Jが発行した「神秘のグレート・ベンド ナムチャ・バルワ」に詳細に報告されている。)このような経緯はあったものの、私とチャンの賀詞交換は途絶えなかったのである。

◆ラトナ・チュリ浮上

95年5月にラサで開かれた「ヒマラヤ登山国際シンポジウム」に招かれて出席した折に、私とチャン二人で合同登山について協議した。私は、7月にヤンラ・カンリだけではなく、同時にネパール国境のラトナ・チュリ(7,035m)と併せて二つの峰で合同したい旨申し入れた。

いずれにしても合同登山実現の可能性が確定的

になったので、10月に機関紙「ヒマラヤ288号」で隊員募集を開始したが、11月になりチベット側はラトナ・チュリに的を絞った計画を提案して来た。私は、この山をネパール側から計画している信州大学の情報を得ていたが、ネパール側の許可取得は困難ではないかと考えていたので、応募隊員数が多ければ、二つの隊を構成するつもりでチベット側に返答した。

ところが、年末になると信大がラトナ・チュリの許可取得に成功したという。しかも「合同で一回限り」の特例であるという。信大の登山時期は96年秋であり、H A Jは97年春であったから、信大によって初登頂されるのは確実と思われた。このため、私は再びチベット側に事実関係を報告して、目標をヤンラ・カンリ峰だけとして合同することを提案した。96年3月には、中国登山協会からこの計画について直接チベット登山協会と協議・議定することについて了解を得た。

◆クーラ・カンリⅡ峰へ転進

相変わらずチベットから回答が無いままであったが、5月には隊員の第一回の顔合わせを行い、本登山はスタートした。そして、私は8月にラサに向いて議定書を交換した。こうしてようやく、9月～10月にチベットのガヤと二人でヤンラ・カンリの偵察を行ったのである。(偵察結果は機関紙「ヒマラヤ306号」を参照。)

偵察の結果をラサで検討した結果、私もチベット側も主にアプローチの事情から、今回はヤンラ・カンリ登山は不可能という結論に達した。私は、日本側は隊員も決定し、準備活動に入っていることを考慮して、目標を変更しても予定通り97年春に合同登山を実施したい旨申し入れを行った。チ

ベット側もこれを了承して目標の選定を行った。私は、山群の主峰ではないが、未踏峰であり高度も7,418mであるクーラ・カンリⅡ峰を提案し、チベット側も了承した。この時は、手元に資料がなくて、先入観として「クーラ・カンリの南面、北面は絶壁でルート無し」と思っていたので、Ⅱ峰へのルートは、既登の主峰越えとした。

帰国後、隊員集会を開いて、偵察結果と目標の変更について説明し、全員の了承を得て、引き続き準備活動を行う。同時に、ルートについて検討した結果、86年秋にH A Jが派遣して初登頂に成功したカルジャン(7,216m)の裾野から、カルジャンとクーラ・カンリⅢ峰(7,381m)の間にあるスノー・プラトーに登り、さらにそこからⅡ峰とⅢ峰の科尔を経てⅡ峰に登頂可能ではないかとの意見が出て、Ⅰ峰経由にするか科尔経由にするか、隊員の希望を聞く。多くは未知のルートである科尔経由を希望したので、早速チベット側にルート変更について申し入れを行った。(出発するまで回答は無かったが、以後日本側は科尔経由で準備を進めた。)

◆副隊長リタイア

隊は、正月合宿を北アルプスで行い、成果を挙げて終了したものの、下山後の1月3日松館副隊長から、「年末に医師から父親の生命が、春ぐらいままでと宣告された」ため、隊への参加を取りやめたい、と申し入れがあった。事態が事態だけにこれを了承し、代わって樋上に副隊長を依頼した。こうして、北海道、千葉、東京、石川、三重、大阪、広島から参集した7名は、クーラ・カンリⅡ峰の頂を目指したのである。

◆合同登山について

かって「合同登山」は、登山隊が許可取得の手段として用いることが多かったが、ヒマラヤ諸国を取り巻く国際政治の状況変化により、この手の合同登山は少なくなった。逆に現在では、登山隊を受け入れる国である、インドやネパールの一部の山々については、登山規則によって「合同」が義務づけられている。

今回の合同登山の発端となったヤンラ・カンリ

のケースは、合同でなければ登山許可が降りない山ではなかった。それでは何のために合同登山とするのか。

私の合同登山に対する考えは、既に前回のラブチェ・カン登山の報告書で明らかにしたのであるが、「登山する山のある国の人と一緒に登りたい」ことにある。

したがって今回も隊を構成する段階で、今回の合同登山は「民間レベルでの交流」を念頭に置いていることを説明し、隊員には理解を求めたのである。

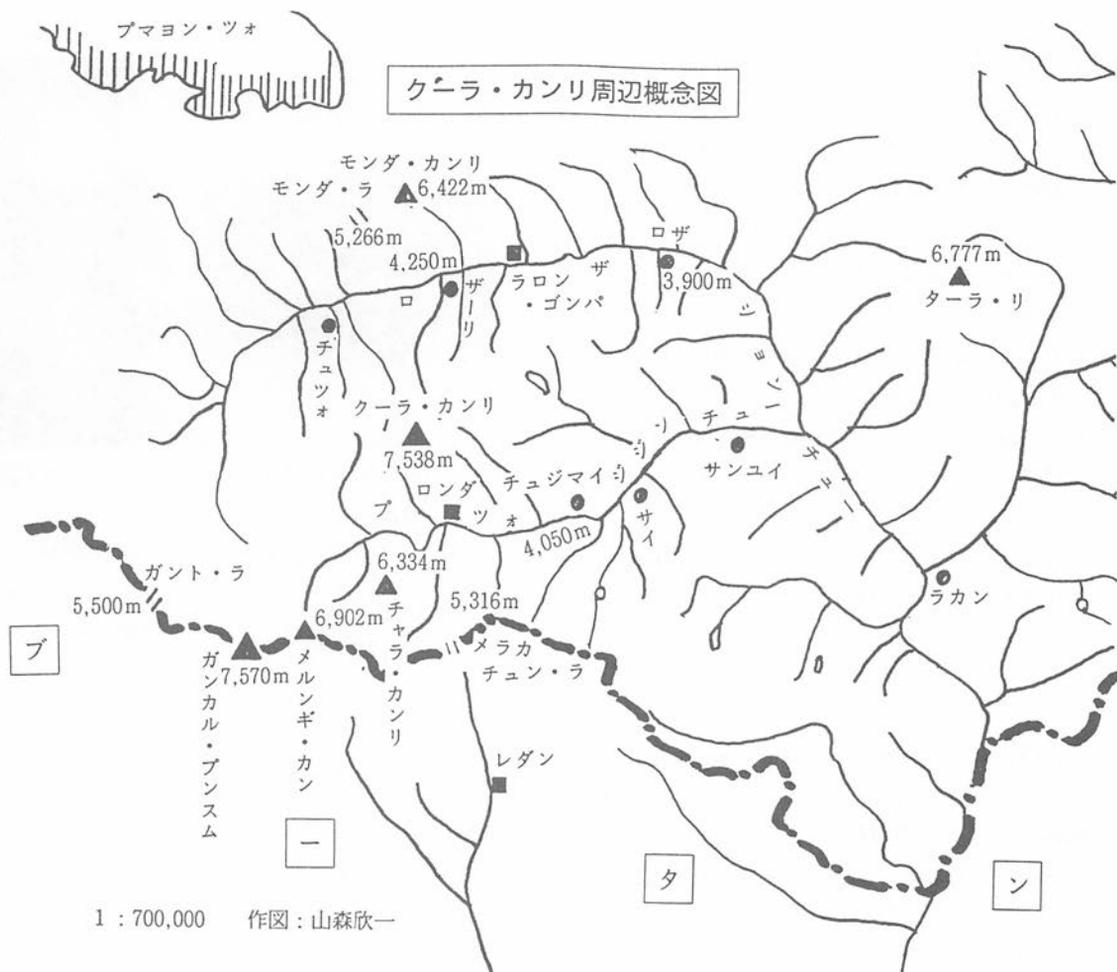
実はこのことは、参加する隊員にかなりの努力を要求することになるのである。言葉や生活環境が異なる人達が、一緒に登山することは困難であり、実を結ばせるためには相互に相当の努力が必要である。

しかし、21世紀に向けて、民族が相互に交流し、理解しあわなければ、共存することは出来ないことは目に見えているのであるから、登山の困難に加えて、合同する困難を乗り越えることによって民族の相互理解も進み、深まるだろうと考えているのである。

私は今回の合同登山について、このような思いを込めていたのであるが、それがどの程度理解されていたかは不明である。むしろ隊員個々について、今回体験した合同登山の成果については、性急に求めるべき性質のものではなく、いずれの日にか今回の合同登山の成果が実を結ぶことを期待している。(記：山森 欣一)

登山隊の概要

1. 隊の名称
日中友好クーラ・カンリⅡ峰合同登山隊
2. 派遣母体
日本ヒマラヤ協会／チベット登山協会
3. 目標の山
クーラ・カンリⅡ 7,418m
(庫拉崗日Ⅱ、Kula KangriⅡ)
中華人民共和国西藏自治区洛扎県
4. 登山期間
1997年3月25日～5月23日(60日間)
5. 目的



- * 本会とチベット登山協会合同によるクーラ・カンリII峰の初登頂
- * 山岳自然環境の保全（テイクイン、テイクアウトの実践）
- * 日本と中国の友好親善交流

隊員	加措	(Jiatso)	37
"	小齊	米 (Xiao Qimi)	32
通訳	催雄	(Chui Xiong)	27
コック	李虎民	(Li Humin)	37

太陽の都へ

6. 隊の構成

(日本側)

隊長	山森 欣一	(53)	東京
副隊長	樋上 嘉秀	(53)	大阪
登攀L	宮崎 久夫	(47)	千葉
隊員	干場 晃	(45)	石川
"	太田 康夫	(44)	広島
"	伊藤 政義	(43)	三重
"	吉田 健吾	(24)	北海道

(中国側)

隊長	多吉甫	(Dojibu)	57
登攀L	嘎亞	(Gaya)	46
隊員	多布傑	(Duobujie)	42

3月25日 寺沢、中川、岩崎の3氏に見送られて11時に全員でH A Jルームを出発。箱崎で出国手続きを済ませてリムジンバスで成田に向かう。

成田では、待ち時間に某隊員の財布紛失騒動があったものの、CA926便は定刻から11分遅れの15時6分快晴の成田を飛び立った。

現地時間17時30分北京着。空港には中国登山協会(CMA)交流部の張江援部長、趙建軍、趙連友両副部長などが出迎えに来ており、トランシーバーの手続きを済ませた後、そのまま市内の韓国料理店に向かう。そこでCMAの顔副主席、交流部の営道水部長と合流し歓迎宴となった。

21時過ぎに前門飯店に投宿。私は、その後飯店のコーヒーハウスでCMAの曾曙生主席と李致新副主席と会い、30分ほど北朝鮮登山協会の件について懇談する。引き続き、当の北朝鮮オリンピック委員会の李学武氏(登山協会を作る責任者)ら2名と、意見交換を行ったが、これらはすべてCMA弁公室の李豪傑氏の取り計いであった。

3月26日 スモッグの北京を8時49分に飛び立つ。雨上がりの成都に11時13分到着。四川省登山協会の王華山副秘書長に出迎えられて、昼食後ラサ大飯店に投宿。夜は、登山協会の羅大秘書長の招宴で健康火鍋に舌鼓を打ち、ラサ入り前の楽しい一夜を過ごす。

3月27日 雨上がりの成都を6時25分に飛び立つ。金沙江を越えると、機上からはチベットでもこれから岳人の注目を浴びるニエンチェンタンラ山群東部の山々が目に飛び込んで来る。びっしりと雪を付けて鋭く天を突く山々の姿は圧巻である。物凄い数の未踏峰が静かに眠っている。

8時32分快晴気温-2℃のラサ、クンガ空港に到着。チベット登山隊の成天亮氏と今回のチベット側隊長であるドジブ氏と通訳の催氏の出迎えを受け、全員にカタが贈られた。11時にヒマラヤホテルに投宿。本日は休養であるが、隊員達は早速見物に出かけた。それにしても、東京宛のハガキ用切手代が、昨年秋の2.6元から4.2元に値上りしているのに驚いた。

3月28日 暖房が故障中で、ホテルの室内温度は10℃と寒い、中国は全土で北京標準時間を使用している関係で、ラサでは7時40分頃に明るくなり、日が暮れるのは20時半頃。

10時にチベット登山協会の倉庫に向いたが、昨日の打ち合わせにもかかわらず、「鍵屋」さんがいないため出直し。14時から16時20分までデポ品のチェックとシュラフ干しなど行った。

3月29日 今日は10時から梱包作業を行い、11時過ぎには全て完了した。私の体調は絶不調。隊員は大昭寺を見物に出かけた。

18時10分から「壮行会」が開かれ、チベット体育運動委員会の姫嘉主任と私が挨拶。40名ほどの出席で20時半過ぎまで盛り上がった。テレビや新聞の取材陣もかけつけた。

▼凍結したヤムドクツォとニンチン・カンサ



3月30日 午前中は休養。午後から隊員達は裏山に高所順応訓練に出かけ、4,100mまで到達。

3月31日 隊員は、午前中ポタラ宮を見物し、午後から昨日の続きの高所順応に出かけ、4,250mまで到達。私の部屋の窓からその様子を見る事が出来た。順応から帰ってきた後、荷物をトラックに積み込み出発準備は整った。

ベース・キャンプを目指して

4月1日 ヒマラヤホテル前で大勢の人から、チンコー酒を振舞われ、カタをかけられる等の盛大な見送りを受けて、ジープ3台(1台はガヤの運転する北京ジープ)とトラック1台で9時半快晴のラサを出発した。

12時5分にカンパ・ラ(4,756m)に到着。眼下に氷結したヤムドクツォが見え、この湖越しに今年のサマー・キャンプの舞台であるニンチン・カンサの雄姿を見る事が出来た。これまで何度もこの峠に立ったが、ニンチン・カンサが見えたのは初めてである。

後続の車を待ったり、事故車のために待機したりして時間をとられ、ランカズーの「雪域高原飯館」という大層な所で昼食をとった時は、既に15時半となっていた。

ここを16時55分に出発し、プマヨンツォの峠に着いたのは19時。湖越しに見えるクーラ・カンリ、カルジャン山群に一同感激。強い風の中、湖の東岸を回ってモンダ・ラ(5,266m)を20時25分に通過。ここから一気に千メートル下ることになるが、北京ジープが遅れているので途中で待機する。

21時半過ぎに北京ジープが到着し、モンダに降

りる。右折して昨年偵察の折りにテントを張った場所を通り越して、真っ暗闇の中、ジープはドンドンとロザジョン・チューを溯って行く。どうもこれはおかしいと思ったが、私は行き先を知らない。その内北京ジープも到着し、運転手は付近の酔っぱらいの親父などから情報を仕入れて、今来た道を引き返した。結局彼らの目的地である「曲措郷」の招待所に到着したのは23時であった。ドジブ隊長らのジープは、21時半に到着していたとのことであった。ベッドはあるものの布団が無い。シュラフのある者はそれに潜り込み、無い者はそれなりに工夫して遠征の初夜を過ごしたのである。4月2日 快晴で明けた。眼前にクーラ・カンリとカルジャン、ガンシャーラムなどの山々が聳え立ち絶景である。饅頭で朝飯を済ませた後、トラックから荷を降ろす。ジープ2台とトラックがラサに帰るので、日本への手紙を託す。

ドジブ隊長は、明日ヤクでBCへ荷上げをするとい、目の前に広がる丘を指さしBCまでのルートの説明し、ガヤの北京ジープで県庁のあるロザへ行った。

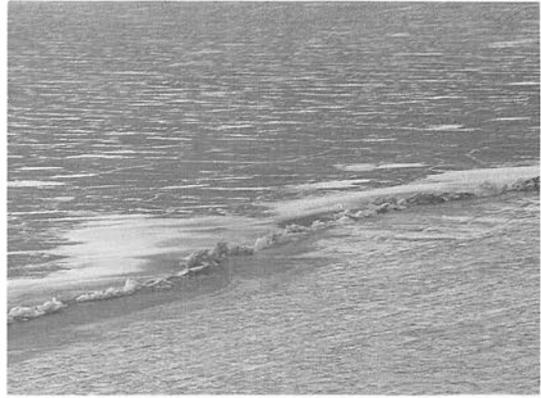
隊員達は、昼食が15時と聞いて、その丘を目指して登って行った。ところが帰って来た彼らの話しでは、このルートからBCを作るとそれは1986年の神戸大学隊のBCと同じではないか、それだと、我々が予定しているクーラ・カンリⅡとⅢのCOL経由のルートとなるABCまで、幾つもの尾根を越えなければならず、BC～ABC間の荷物輸送をヤクで予定しているのに、とてもヤクには越えられない、という。

ロザから帰った隊長に、今予定しているBCは



▲BC用大テント設営風景

▼プマヨンツォ、5,000mの御神渡り



違うことを告げ、我々はモンダから登ることを話す。と、彼も朝話したルートではなく、小学校の裏の丘を越えて行くと湖があり、そこがABCだという。私達は湖の辺にABCを予定していたので、てっきりモンダの話だと解釈し喜んだ。明日、日本側は小学校まで歩いていく事になった。12～13kmの公道なので安心して眠りについた。

4月3日 昨夜の小雪のため周りの丘も冠雪して真っ白である。今にも降り出しそうな曇天。ヤクではなく馬が来て荷を分けている。郷の書記が出発の儀式をするというが、チンコー酒を注ぐ器をしまつてある戸棚の「鍵屋」さんが見つからず待たされる。結局出発したのは10時になっていた。

昨日の打ち合わせのとおり、日本隊員と通訳は先に歩き出した。しかし、歩き出して40分ほどすると小学校があった。ひょっとして昨日隊長が話していた小学校とは、これのことではないのかと疑問になり、宮崎登攀隊長と通訳に伝令になってもらい曲措に引き返してもらおう。残ったメンバーはその場で待機。2時間半して宮崎は目の前の丘から降りて来た。悪い予感は当たり、馬やチベット隊員は、目の前の丘を越えてBC予定地に出発した後で、追いかけて隊長に追いつき、事情を話したところ、隊長は降りて来るとのことであった。

結局、この日は隊長と日本側は再び曲措郷に引き返した。ここで隊長は議定書の話しを出してI峰に登ることになっていると言い出す。経過を説明し、いずれにしてもI峰経由のルートでは登頂の可能性がないから、時間がかかってもモンダへ移動してⅡ峰～Ⅲ峰間のCOLからのルートに入るべきである、と説得する。隊長も納得して明日は

馬を連れてBCの撤収に向かうこととなった。

22時過ぎに夕食が出来、なんと布団が持ち込まれた。地獄から天国である。ついでに夜中になってHR彗星まで見る事が出来た。

4月4日 曇天で明けたが、やがて雲が割れて、強い陽射しとなった。昼過ぎから西の強風が吹く。19時までには全部の人と荷が帰って来た。日本側の荷物を確認する。明日はトラックでモンダへ移動することになった。

4月5日 朝方東の空に二日月有り。9時50分トラックに荷を積み込む。背負子が一台無い。探すも出て来ないので諦めて出発する。ガヤの北京ジープに隊長と私、宮崎、ドブジュが乗り、残りはトラックの上である。

モンダを過ぎて東へ行き、11時40分BC地に到着。東の強風が吹き、太陽の恵みが無いので寒い中、2時間弱かかって3張の大テントとトイレを二つ作ってBC建設を終えた。

ところが、荷物を数えてみると、日本側では2つの中プラパールと背負子が紛失しており、中国側でも卵300個と幾つかの荷が無くなっている事が判明した。このためドジブ隊長はBC開きどころではなく悄気ている。

BCのある所はモンダではなく、ザーリ郷であることが分かった。10年で行政組織も変わったのであろう。日本側だけでささやかにBC開きを行った。

BCで足踏み

4月6日 BCはロザジュン・チュー沿いにつけられた公路の道端にあり標高は4,250m。普通の



▲BC風景、合同隊らしく国旗が

▼BCの対岸からカルジャン山群を見る



生活圏である。朝方チベット犬がけたたましく長い時間吠える。チベット側と協議し、明日双方2名でABCを偵察することになる。また、チベット人はゴミを燃やすことに抵抗があるので、今回の登山でゴミを焼却することについて了解を得る。

日本側だけで今後の進行について打ち合わせを行う。この場で私からあらためてこの登山では、BCから上の登攀については、全責任を宮崎登攀隊長に委任することを話す。また私と樋上副隊長、宮崎の3人でミーティングを行い、2つのパーティ編制を決定した。Aは宮崎、太田、伊藤。Bは樋上、干場、吉田とした。その後、チベット側にトランシーバーとガモフ・バックの使用講習会を行う。夕食時BC開きとなる。

4月7日 8時で-8℃。8時半過ぎに宮崎、太田とドブジュ、シャオチミが馬一頭を連れてBCを後にABCの偵察に出発した。10時半過ぎには日本側の残り5人も高所順応と、トランシーバーの使用試験を兼ねて目の前のピークに出かけた。

17時半過ぎに宮崎、太田が帰幕。ちょうど雪が本格的に降って来た。チベットの二人はABCに泊まった。隊長とガヤは泥棒のことをロザの公安(中国の警察)に報告に行った。

4月8日 昨夜からの積雪は5cm。8時20分、日本側隊員6名はABCへ順応のため出発。不調者もいたため結局この日ABCに到達したのは、干場、太田、吉田であった。

4月9日 ものすごい朝焼け。宮崎、太田は休養し、残る4人は8時20分ABCへ順応のため出発。快晴となり暑い。地形の関係でBCとABCの交信が心配である。我々の荷物を盗んだ泥棒6人が

捕まったらしい。

4月10日 8時-5℃。一日中東の強風吹きまくる。全員で上部に上げる荷物の再梱包を行った。

4月11日 8時頃から雪となる。馬方が馬を連れて来たが、チベット側が動かず虚しく引き返す。

夜、ロザの公安が来て盗まれた荷物の大部分が帰って来た。不足分については弁償する！だと。私はいらぬと言ったが、あくまでも弁償すると偉いさんは見栄を切った。結局BCを離れる迄、なんの音沙汰も無かった。

4月12日 一日中穏やかな日。-10℃、テント内凍り、メステントの脇にツララがぶら下がっていた。チベット側は全く動かず停滞となる。曲措の書記がチンコー酒を持ってお詫びに来た。

(記：山森 欣一)

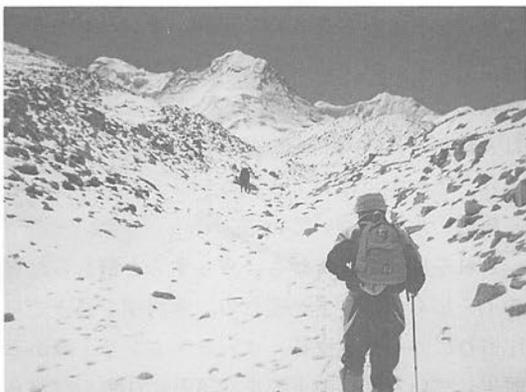
ABC偵察記

4月7日 午前8時、-8℃。風無く陽射して雲割れてくる。BCを間違えるなどの手違いのため、予定より3日遅れているが、ようやくABCの偵察する日がやってきた。

8時35分、日本側宮崎、太田、チベット側ドブジェ、シャオチミと、一泊の予定なので荷物を積んだ馬を1頭連れた馬方と共に、隊長達の見送りを受けて気合いを入れてBCを出発した。

目の前の畑の畔道を通り、民家を通り過ぎると大きな石ころだらけの河原となり、非常に歩きにくい。私は上部は雪だと思ったので始めから登山靴を履いたが、チベット側は運動靴のため、段々と彼らに離されてしまった。

左側のモレーンには、大きな風穴が何箇所かあ



▲ABCに向かうとII峰が姿を現わした

▼ABCの荷上げは馬で



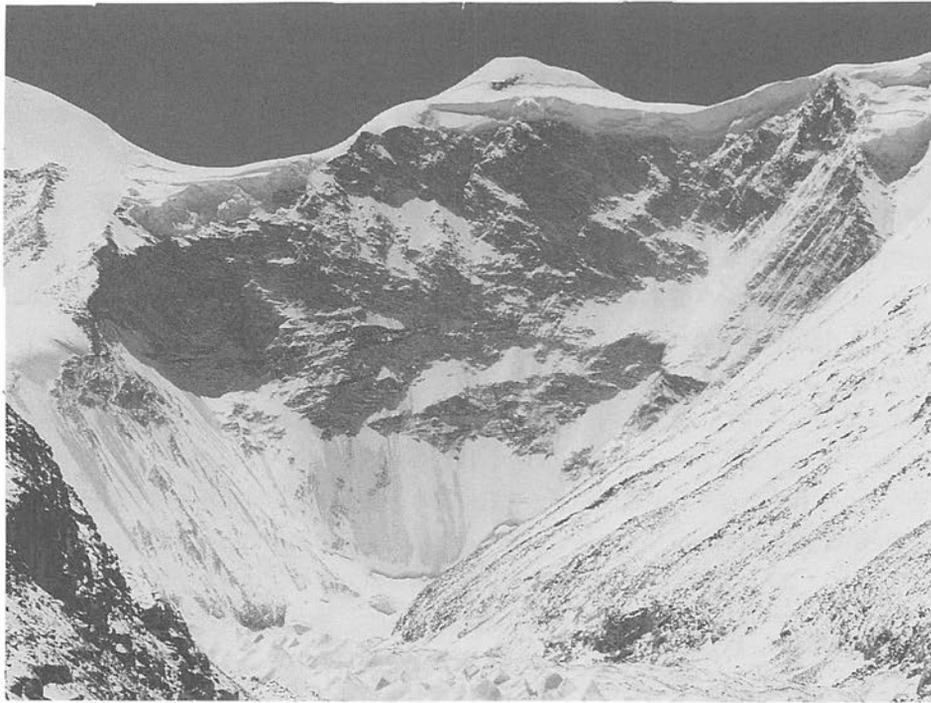
り、自然の脅威を物語っている。歩きにくい河原を右に進み、10mほどの丸木橋を渡り岩壁の下を通り過ぎると一軒の民家に出た。岩壁にはチベット文字が書かれており、さらに上部に行くと大きな洞穴があって、そこへ続く道が見えるので、多分その昔この洞穴の中ではラマ達が修行したのではないかと思われた。

ここから河原を離れ、斜面を登り切ると広いカールに出た。左側の丘状の下部をその中間部にある大岩を目安にして進む。暫く歩くとヤク道となり丘の上に出る。丘には、石を積み重ね動物の毛を巻き付けた枯れ木が差してある一種のタルチョーが所々にあり、それが格好の道標となり大いに助かる。上に進むとこのタルチョーがさらに大きくなっていった。

その大きなタルチョーから左側に行く。右側から落る落石に注意をしながら進むと、大きなカルカが二つあった。チベット隊員は目の前の尾根を登っていた。後でこの尾根は、クーラ・カンリI峰から降りていることが分かった。

この辺りからチラホラと雪が出てきた。尾根の一番左に見えるピークに、ケルンが見えたのでそこを目指して登るが、何時のまにかチベット隊員を見失った。ケルンの下にも彼らのトレールは無かったが、尾根の左側には石積みの道があるのでこれを使って氷河に降りた。

氷河の先は広い平地となっており、ここが1986年にH A Jが派遣した、カルジャン隊の報告にある氷河湖らしい。そう思うと俄然足取りも軽くなる。しかし、この広い雪原を歩いても歩いても、前を行っている筈のチベット隊員の姿が見えない。



◀ 圧倒的な北壁を持つクーラ・カンリⅡ
(ルートは左手の雪壁を予定した)

段々と焦って来る。雪原の真ん中に小さな丘があったのでそれに登って見ると、彼等は既にこの雪原を通り越し、遙か前方のモレーンの上にいる。

私は、カルジャン隊と同様にこの雪原にABCを建設するつもりでいたが、チベット隊員が前に進んでいるので、左側のモレーンの谷筋を通り、上に登るとチベット隊員と馬方がいた。13時50分。

モレーンの上は、台地となっていて雪崩や落石の心配もないのでABCとした。標高5,400m、水場は10分ほど下の氷河湖から汲む。BCから12.5km。チベット隊員は、今日ここに泊まって明日上部を偵察すると言うが、私達はBCに降りる事にした。14時50分ABC発、17時30分BC帰幕。

(記：宮崎 久夫)

登山開始

4月13日 朝8時、-7℃。東のターラ・リの谷に雲がある以外は快晴。今日はいよいよ待ちに待ったABCへ移動する日である。8時過ぎに馬が集まってきた。馬19頭、ロバ1頭。日本隊は一足先の9時前に出発する。登山終了までBCに降りる予定はないので、隊員の写真を撮る。30分後にはチベット隊員と馬もABCを目指して出発した。BCは私とドジブ隊長、コックの3人となり急に

静かになってしまった。

BCとABCは地形の関係で、トランシーバー交信が危ぶまれていたが、BCの前を流れるロザション・チューを渡って、対岸から交信を試みたものの、結局この日は交信できなかった。

4月14日 C1偵察のため宮崎、太田、ガヤ、ジャツォの4名がABCから5,800mまで到達した。

4月15日 ABCから宮崎、太田、ドブジェ、シャオチミが先行し、残る日本隊4名も後を追ひ、C1を往復した。この日、ABCからC1へ荷上げするためポーター6名がABCに登った。

C1へ

4月15日 ABCを8時に出発。モレーンを5分ほど登ると、左下に大きな氷河湖が見える。全面氷結したその姿は神秘的ですらある。氷河湖の先は大昔から長い時間をかけて作り出された氷河があり、その中にはスノーベニテンテスと呼ばれる三角形の氷柱が続いている。

これを横目で見ながら、うっすらと積もった雪の上を歩くのだが少々疲れる。氷河湖を過ぎて左岸寄りにルートを探り、クーラ・カンリⅠ峰から派生している尾根の下部を、落石に注意しながら進む。氷河内のスノー・ベニテンテス寄りにはルー

トにならないので、遠回りでもモレーン上に安全なルートを作りながら赤旗を立てて行く。

左にカルジャン北峰を見ながら、登りつめて行くと歩き易くなってきた。視界も効くようになって、前面にはクーラ・カンリⅠからⅡ、Ⅲ峰が大岩壁の上にそそり立っており、左にはカルジャン主峰が雄々しい姿で峻立している。絶景である。

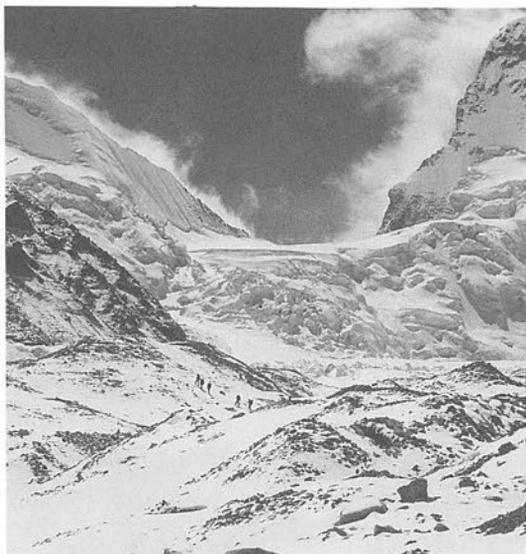
C1は、氷河左岸の小高いモレーンの上に建設する。ここは両側が氷河となっていて、クーラ・カンリⅠ峰から発生する雪崩は右側の氷河に、Ⅱ、Ⅲ峰からの雪崩は左の氷河に落ちるので、雪崩に襲われる心配は無いが、テントを張るスペースが少ないのが難点である。標高5,900m、ABCから6.5km。 (記：宮崎 久夫)

登山活動

4月16日 樋上、干場、伊藤はC1を往復。ジャツォが6名のポーターを連れてABCからC1へ荷上げしたが、ポーターの中には不調者もいた。

この日から日本側は、BCと各パーティの交信時間を8時、正午、19時の3回とした。AとBパーティ間の交信は偶数時00分とする。また、パーティ編成をA=宮崎、太田、吉田とB=樋上、干場、伊藤に変更した。C1に行ったジャツォが、ポーターの件を報告するため一気にBCへ降りてきた。

4月17日 暖かくなる。AパーティはC1入りし、



▲C1へ向かう日本隊員5名

▼ABC風景



他は休養。ポーター9名がABC入りする。

4月18日 ABCからC1へ12名のポーターによって荷上げ完了。Aパーティは氷河を左岸から右岸に横断して、スノー・プラトーの取りつきであるアイス・フォールの下に到達し、氷河下流からアイス・フォールに取りついた。(日本ルート)

C1に向かったBパーティは伊藤不調等のためABCに戻る。

4月19日 Aパーティとチベット側3名で、氷河上流からアイス・フォールに取りつき、固定ロープを9本張り、6,150mに到達した。(チベットルート)

4月20日 C1は出発準備を整えたものの、降雪のため停滞となる。ABCも停滞。

4月21日 降雪のため全員停滞。C1は30cm。

4月22日 ドピーカンであるが、昨日の降雪のため全員停滞。C1では長時間日中交流が行われ、多量の酒が消費された。

4月23日 昨晚またしても降雪。停滞の予定であったが、日中協議の結果C1メンバーはABCへ下山。ドブジェを除くチベット側3名はBCまで降りてきた。

4月24日 上部キャンプ休養。この日夕方ラサからCさん一行がBCを訪れる。

4月25日 上部キャンプ休養。BCの山森はCさんらとクーラ・カンリ南面を往復。(この報告はヒマラヤ309号を参照。)

4月26日 ABCの両パーティはC1へ移動したが、BCとは一日中交信できなかった。BCにい

たチベット側のジャツオとシャオチミは、馬を1頭連れてABCへ登って行った。

4月27日 Aパーティは、チベットルートに取りついていたが、下部の固定ロープ4本は雪崩によってスノーバーと共に流されていた。これを補修しながら前回の最高到達点まで登る。Bパーティは取りつき点まで往復した。

4月28日 昨夜から朝方の降雪のためC1は停滞。BCでは夜半10時今遠征中最大級西風が吹いた。

4月29日 干場、伊藤は、日本ルートに取りつき、6,100mに到達。Aパーティは休養。樋上は体調を崩したためABCに降りた。

4月30日 Aパーティは、日本ルートに取りつき、6,200mまで到達したものの、ルートとして不敵と判断して撤収した。Bパーティは休養。

5月1日 昨夜の降雪で壁に新雪がありC1は停滞。ガヤもC1入りしてチベット側も全員揃う。

C2建設ならず

5月2日 この日は、チベット側の4名が先行し、宮崎、干場、伊藤が荷上げしてチベットルートを試みるようになった。太田、吉田は休養。

II峰へのルートについては、C1に上がってチベット側と協議した。結局彼等の主張する、氷河上流からアイス・フォールに取りつく事になったが、雪崩が心配であった。このため日本ルートをはしてみたが、こちらにもルートには不敵だった。

チベットルートは、C1から15分ほどモレーン上を歩き、取りつきに一番近い所から氷河を横断すること約700mで到達する。氷河上であるが、



▲アイス・フォール、日本ルート1P目

▼アイス・フォール、チベットルート取付



まるで大雪原のような錯覚に陥る。

ルートの下部は雪壁でかろうじてスノーバーが入る堅さである。周りにはデブリがあり少々心配である。ドブジェがトップで登る。雪壁を4ピッチ登り、右からトラバース気味に懸垂氷河を回り込む。ここから、氷の上をうすすらと雪が積もった、傾斜60度の氷壁を登るプラトーに出た。

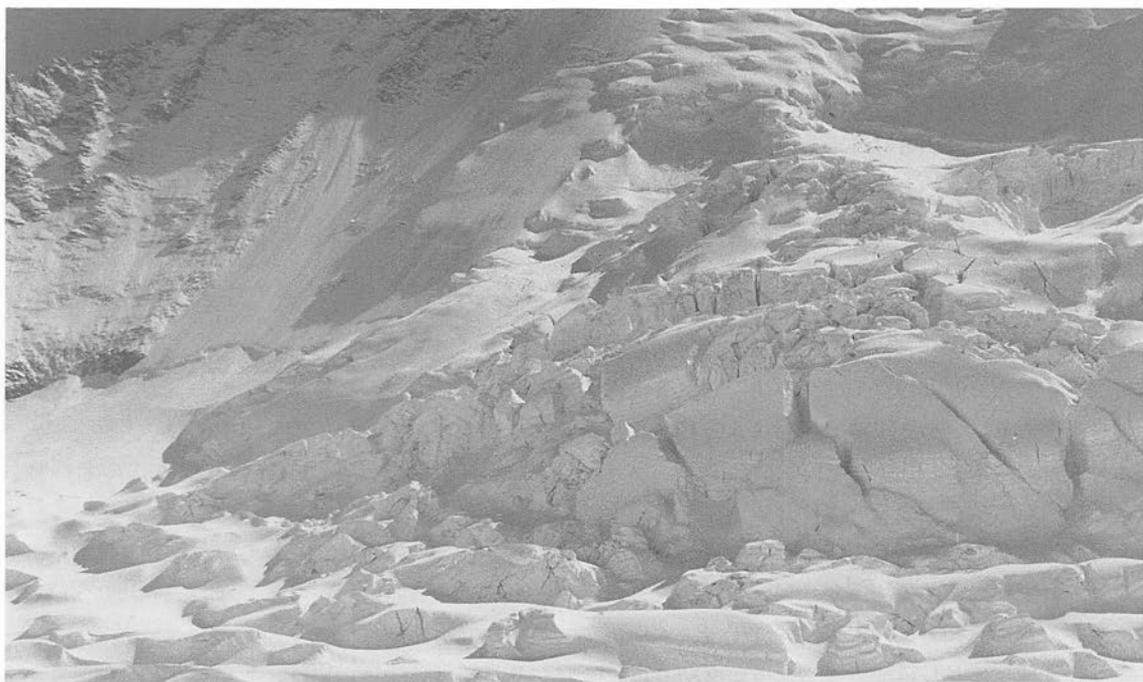
先行するチベット側隊員の2名は、チョモランマやシシャパンマ登頂の実績があり、力強くプラトーをラッセルして行く。ただただ頭が下がる思いである。プラトーにあるヒドン・クレバスを、右に左にと迂回しながら進み、再び60度の傾斜の雪壁を4ピッチ登ると、カルジャン主峰とクーラ・カンリIII峰の間にあるコルとなるプラトーの縁に着いた。

しかし、この縁には大きなクレバスが口を開けて横たわっていて、向こう側に渡ることができない。残念無念のおもいであるが、このルートも断念せざるを得ない。

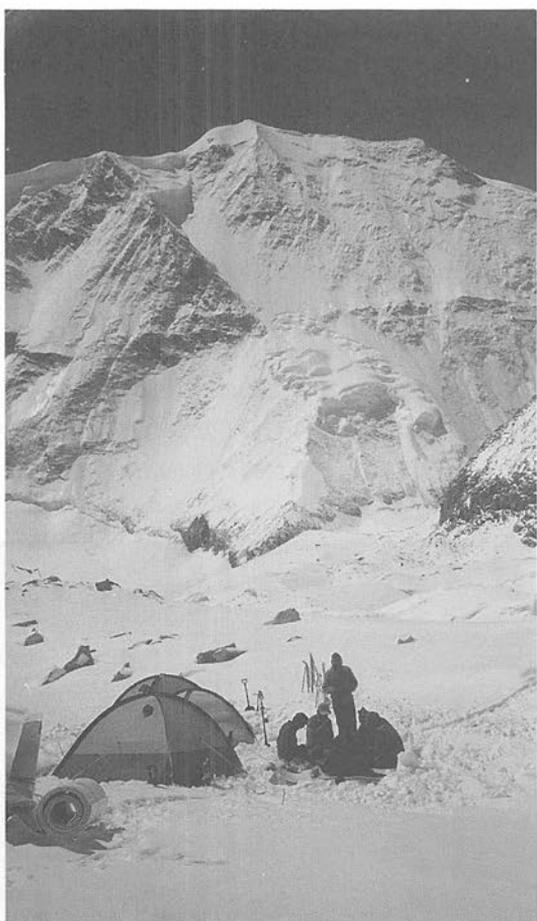
ルートを途中まで下り、チベット側の登攀隊長であるガヤと、別のルートを検討する。チベットルートよりさらに氷河上流に、スノー・プラトー上部に続くダイレクトな氷壁があるのだが、降雪があると、100%なだれることが分かっているので、ルートとしては使えないと、双方共見解が一致した。そうすると、北側からII峰を登るルートはなかった。

こうして、我々はC2を建設する事ができないまま、6,350mに到達したのを最後にクーラ・カンリII峰合同登山を断念することとなった。

(記：宮崎 久夫)



▲左端からアイス・フォールに日本ルートが伸びる



▲C1とクーラ・カンリI峰

登山終了

5月3日 昨日C1から中国ルート断念の報告があった。BCでは、II峰へのルートはないのか？II峰断念しても、他の山（例えばカルジャン中央峰）のトライを検討したらどうか？。などを伝えたが、いずれについても隊員達は無理であるとの結論であった。

BCでドジブ隊長と協議した結果、10時半正式にクーラ・カンリII峰登頂断念を決定し、下山行動を指示する。ギャと干場、伊藤はABCへ。

5月4日 太田、吉田で氷河上の標識を回収。ポーター13名がABCへ登る。ギャBCへ。

5月5日 C1を撤収してABCまで降りる。

5月6日 朝早く隣の部落から15頭の馬がABCに上がる。12時45分に樋上、宮崎、干場、太田が真っ黒になってBCに帰ってきたのを皮切りに、13時15分までに全隊員と隊荷がBCに集結した。

20時から全員の健闘と無事の生還を祝う宴が、果てしなく繰り広げられた。こうして、登山期間を大幅に残して、日中友好合同登山は、幕を閉じたのであった。

下山

5月7日～12日 BCにて時間待ち。この間にザリーのBCから東に車で半時間の所にある古寺「ラロン寺」を見学する。寺の前には千年という古木が数本あり、したがってこの寺も唐時代に建設されたと言われているらしい。常駐の僧侶が二人いるが住いは別で、必要な時だけ寺に来るようだ。中には、クーラ・カンリの神と云われる像があっ



▲正面左が日本、右がチベットルート

▼5月2日クレバスに阻まれて下降する



た。11年前の神戸大学隊の時代はこの名称は、「ハロン」と報告されている。

9日から天候は安定している。12日は部落の人やザリー郷の幹部がやって来て、チンコー酒の酒盛りで明け暮れた。

5月13日～15日 13日、ドピーカン。朝早くからBCの撤収を行う。テントの撤収跡のゴミを拾い、これを燃やし、溝を埋め、トイレを埋め、なんとか原状復帰を試みるが、溝だけはどうすることもできなかった。村人に見送られて、39日間お世話になったザリーとカルジャン、ゴウラ・カンリに別れを告げる。8時20分BC発。9時35分モンダ・ラ着。青空にクーラ・カンリ、カルジャンの雄姿が映えている。12時22分、ランカズー先でラサへ直接帰るチベット一行と別れて、日本側とドジブ隊長、催の9名は2台のジープでシガツェに向かった。ニンチン・カンサ南面のアイスフォールを見て、ギャンツェで遅い昼食を食べ、18時シガツェ着。10年前にお世話になったトンジュ氏と再会した。14日、シガツェにてタシルンボ寺を見学。絨毯工場を冷やかす。15日、9時半シガツェ出発。ヤル・ツアンボ江通しの快適な道を飛ばし、15時過ぎにラサのヒマラヤホテルに投宿。

5月16日～23日 16日、倉庫でデポ品の整理をするがBCで作業したので簡単に終わる。HAJへ電話とFAXで報告。17日、パルコルで買い物。帰国チケットの手配。夜はチベット登山隊に行き、ギャ、ジャツォの家で飲む。18日、デプン、セラを見学し、ドジブ隊長の家で飲む。今夏のニンチン・カンサ隊の依頼事項について高謀興秘書長と打ち合わせ。19日、ゴンブ、成天亮、ロツェ、グ

イサンなどを交えて送別会。夜は通訳の催のご苦労さん会となる。20日、6時過ぎにホテルを出る。誰の涙か途中から豪雨となる。9時25分雨のラサを離れる。10時54分今にも降り出しそうな成都に到着。錦江賓館に投宿。夜、ミニヤ・コンカ隊の連絡館高敏氏一家が訪ねて来る。21日、空港に着いてカウンターに行くと、なんとチケットは明日のものだった！。羅、高両氏が走り回って漸く搭乗。9時5分成都を出発。28℃の北京に11時過ぎに到着した。22日、全員でCMAに向かい曾曙生主席、李致新副主席、楊世濤副部長と懇談し労いを受ける。主席には今登山で体験した中国側の幾つかの件について報告する。その後、懐柔県の万里長城に行く。再びCMAに寄り、今夏のニンチン・カンサとムスターグ・アタの荷物の件を打ち合わせ。また申請中の山のプッシュを行う。夜、更に打ち合わせを行い、質すべき件について意見交換を行う。23日、営道水部長、楊世濤副部長の見送りを受けて、CA925便は定刻に北京を離れた。成田到着後解散した。

(記：山森 欣一)

おわりに

中国は10年前に比べるとすっかり変わってしまった。との印象が強い。北京、成都、ラサのどこをとってもその思いが強い。十年一昔と云うが、それ以上の差を感じる。

翻って、今回の我々の合同登山の現場では、どうであったろうかと、振り返る時、そこで一番感じたことは、前言を否定することになるが、中国・チベット人は十年一日のごとき登山観である、と



▲BCでテイクイン、テイクアウトを実践

▼登山終了後、BCで記念撮影



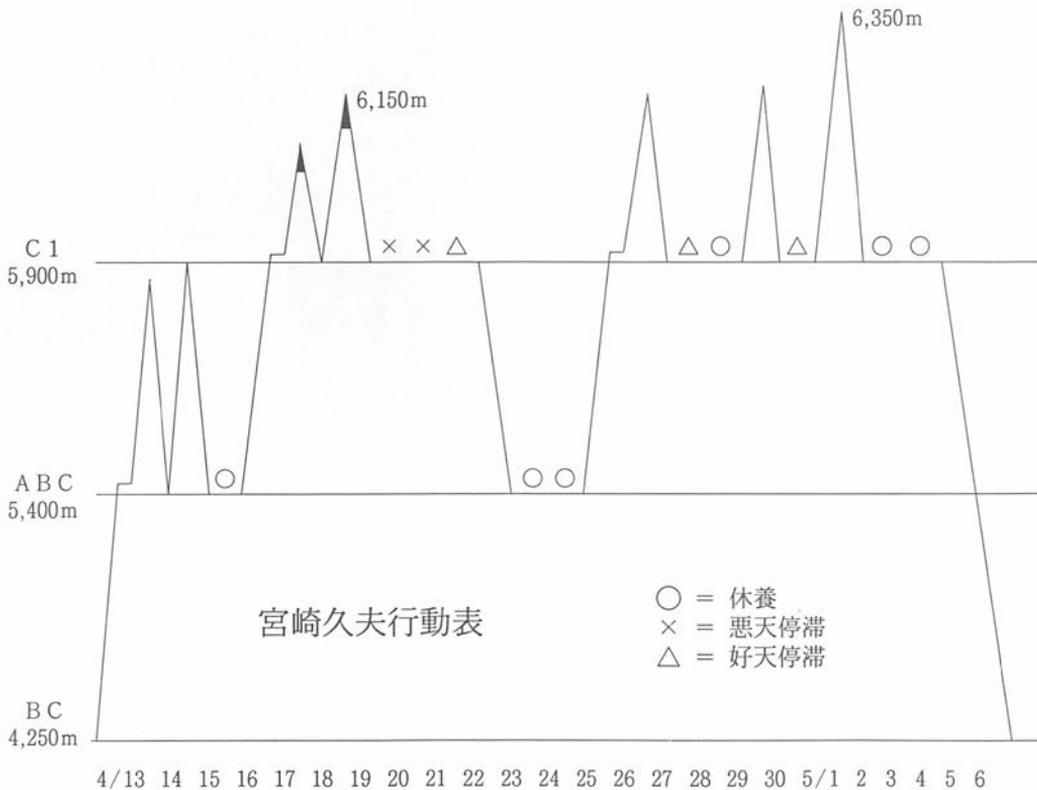
言う事である。確かに高所登山の経験は増えて技術的にも、向上しているのではあるが、本人達は、登山の現場はあくまでも「戦場」であることから脱却していないのである。

言い替えば、彼らのそれは「登山」ではなく、高所での仕事なのである。勿論、それらが、中国の社会体制から来ている事は承知しているし、彼の国が我々の国と異なる事は十二分に承知している。

つまるところ、私の印象として感じる事は、一方では、十年一昔を思わせるスピードで進展する経済的な恩恵を享受できるシステムは存在しているが、片方ではそれに見合う刺激の発露が無い。正確には発露の仕組みが構築されていないことである。個々にはそのようなクライミングという行為に対して欲求を持つ人はいるのであろうが、システムが無いので、十年一日のごとき仕事を展開しているのである。そして、我々は正にその高所仕事人と合同を組んだのである。(これは奥歯に物の挟まった言い回しになってしまった。)

日本側の登山のことに言及すると、この報告から受ける印象は、隊員各自が持っている能力を出し切る前に登山は終わったようにとられるかも知れないが、現場での実感はそうではない。

その一つの例として、現場で行われた予定外のポーターの投入がある。ABCからC1への荷上げは、隊員のみで実施する予定であったが、専らチベット側の事情によってポーターを投入した。このことは、結果的には日本側隊員の疲労を少なくしたことは事実であるし、仮にこのポーターの投入がなければ、日本側隊員は相当疲労困憊して



いたと推察出来る。そうであれば結果もまた違っていたことは想像に難くない。

言い替えば、前述したような「仕事」としてのチベット側の思惑によって、日本側隊員の労力が少なくて済むという結果をもたらしたのである。

とまれ、10年前にも書いた事であるが、合同登山とは、相手のアラ探しや規則にのっとりた点検作業ではないということである。お互いに違う文化や社会体制の中で生きている者同志が、違うことを認め合った上で、共通の目標に向かって努力することが主にならなければならないと思う。そのためには、相手を思いやる「優しさ」が大切なのではないだろうか。このことは、H A J が常に国内合同を基盤としている限り、今後共、世代を越えて、組織としての共通認識でありたいものである。

今回、この隊を構成する時点でも、このことを明確にしてあったが、現場では、高所という魔物によって、そのことが疎外された場面が少々出現したことは残念であるし、次回への課題となったのである。

(記：山森 欣一)

未踏峰隊員募集 カバン峰 (6,717m)

中国チベット自治区ジーロン(吉隆)県に在る、全くの手つかずの未踏峰に挑んでみませんか。ガネッシュ・ヒマールとランタン・ヒマールの間には、数多くの知られざる山々があります。そのほとんどは6,000m級ですが、これまで全く試みられたことのない山群です。(写真は、No.308号参照)山容は7,000m級の山です。楽しい登山が期待できます。概要は下記のとおりです。

記

1. 期間：1998年9月18日～11月1日(45日間)
2. 人員：6名
3. 費用：100万円以内
4. 資料請求：〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501 日本ヒマラヤ協会

クーラ・カンリ北面天候概要 (1997年)

(観測地 BC・ザーリ村 標高約4,250m)

時間	8 時			14 時			20 時			備考
	天候	温度	風向	天候	温度	風向	天候	温度	風向	
4 / 7	☉	-8		☉	4		☉	-4		積雪2cm
8	☉	-8		☉	-1		☉	-3		積雪5cm
9	○	-11		☉	5		☉	-1	E強	朝焼け
10	☉	-5		⊕	9	E強	☉	-2	E強	強力な東風
11	☉	-4	E	☉	5		☉	-2	無	ボタン雪
12	⊕	-10	W	⊕	13	無	⊕	0	無	穏やかな日
13	○	-7	無	☉	11	W	☉	3	W	〃
14	○	-6	W	⊕	12	無	☉	4	E強	夕西に積乱雲
15	○	-4	無	☉	9	E強	☉	2	E	午後小雪舞う
16	⊕	-5	無	☉	5	無	☉	1	無	断続的な霰
17	☉	-1	無	☉	10	E強	☉	2	E強	午後東強風
18	☉	-2	無	⊕	12	W	⊕	2	W	風有・好日
19	○	-6	W	⊕	13	E強	☉	3	W	周辺山融雪
20	☉	-2	E	☉	7	E強	☉	-1	E	曇天風冷たい
21	☉	-6	無	☉	5	E	☉	-3	無	積雪1.5cm
22	○	-9	W	⊕	15	W	☉	1	E強	ドピーカン
23	☉	-6	無	☉	4	W	☉	0	無	小雪舞う
24	○	-6	W	☉	8	E	☉	0	E	午後東強風
25	○	-7	無	⊕	10	E	☉	-1	E強	好日
26	☉	-2	無	☉	12	無	☉	2	無	小雪舞う
27	☉	-2	無	☉	12	E	☉	2	E強	全天曇り
28	⊕	-2	無	☉	10	無	☉	5	E	積雪3cm
29	☉	-2	W	☉	11	E	☉	5	無	昨夜22時西強
30	☉	-2	E強	⊕	10	E強	☉	4	E強	一日中東強風
5 / 1	☉	0	E	☉	10	E強	⊕	2	E	時々霰
2	☉	0	E	⊕	13	E強	☉	5	E強	一時太陽に輪
3	☉	1	無	☉	15	E	☉	5	E	霰、小雪舞う
4	☉	1	E	☉	18	E	⊕	6	E	暑い
5	☉	-1	無	⊕	15	E	⊕	8	E強	好日
6	○	1	無	⊕	12	E	☉	8	E	好日
7	☉	2	E	☉	5	E強	☉	12	E強	小雪舞う
8	☉	0	E	☉	12	E強	☉	3	E	好日
9	☉	0	E	☉	7	E	☉	3	E強	風の日
10	⊕	-2	無	⊕	12	E	☉	3	E	冷たい東風
11	○	0	無	○	16	E強	○	4	無	一番の好日

地域ニュース

《ネパール》

アメリカ隊のエヴェレスト登頂

5月25日、アメリカ隊（トッド・バールソン隊長ら6人）のウォリー・バーグ隊員（42）が、シェルパ6人と共に南東稜からエヴェレスト（8,848m）に登頂した。下山中、シェルパの1人が転落死した。

ガイヤアルパインクラブ隊 ダウラギリ I 登頂

ダウラギリ I 峰(8,167m)を目指していたガイヤアルパインクラブ隊の小西浩文隊長（35）と北村俊之隊員（34）、高所ポーターのギャルツェン・シェルパの3人が、5月31日北東稜より登頂した。小西氏の八千メートル峰登頂はこれで5座目。

また、先立つ5月25日にはオーストラリア陸軍登山隊のザック・ザリアス（41）、マシュー・ロジャーソン（36）、アンドリュー・ロック（36）の3人が、同ルートより登頂している。

ローツェに三隊連続登頂

アンドリュー・クラーク隊長率いる国際隊に参加していたスペインのイヴァン・ロレド・ヴィダルが5月23日、ローツェ（8,516m）に登頂した。

また、同隊に参加していたイギリス人登山家アラン・ヒンクス（42）は、同峰西壁から、単独、無酸素での登頂に成功した。ヒンクスの八千メートル峰登頂はこれで9座目となった。尚、彼はその後マカルー I（8,463m）に挑んだが、強風のため登頂を断念した。しかし、ヒンクスは八千メートル峰14座登頂を目指しており、今年中に残る5座に登頂する予定であるという。

ウラジミール・バチキロフ隊長（44）率いる12人のロシア隊は、5月24日、3隊員が登頂。26日には、ウラジミール・バチキロフ隊長、アナトリー・バクレエフ隊員（39）ら8人が登頂した。

更に、5月26日、イタリア人のシモネ・モロ

（29）が、27日にはアベレ・ブランク（42）が、28日にはマリオとサルバトレのパンツェリ兄弟とフランス人ジャン・クリストフ・ラファイユ（32）が相次いで登頂した。

ロシア隊マカルー登頂

セルゲイ・エフィモフ隊長率いるロシア隊の5隊員が5月21日、西壁からマカルー（8,463m）に登頂した。詳細は不明。（ヒマヴァンタ7月号）

《パキスタン》

K 2 西壁初登攀

未踏の西壁からのK 2登頂を目指していた日本山岳会東海支部隊（田辺治隊長）が、7月19日午後2時30分（日本時間午後6時30分）登頂に成功した。登頂したのは田辺治隊長（36）と鈴木幹夫（30）、中川邦仁（27）の二隊員。田辺氏の八千メートル峰登頂はこれで6座目となった。19日午前5時40分、標高8,100メートルの最終キャンプを出発、約9時間かけて山頂に達した。

最終キャンプまでは1981年の早稲田大学隊のルートを辿り、西稜を登った。残りの標高約600メートル付近で左に大きくコースを変え、未踏の西壁に挑んだ。西壁は西稜と北西稜に挟まれた絶壁で、92年のポーランド隊などの挑戦を退けてきた難ルート。

なお、当初この隊の隊長予定であった徳島和男さんが出発直前の5月5日、北アルプスで遭難したため、急遽登攀隊長の田辺さんが隊長を兼任して計画を続行していた。（7.20.朝日新聞）

群馬岳連隊バルトロ三山登頂

K 2を除くバルトロ三山に登る計画の群馬岳連の3隊が、それぞれ登頂に成功した。

名塚秀二（42）隊長率いるA隊は、BC設営後18日目の7月7日午後2時26分、名塚隊長と星野龍史（30）、品川幸彦（29）、江塚進介（36）の3隊員がガッシャーブルム I 峰（8,068m）に登頂、その後ガッシャーブルム II 峰（8,035m）に向かい7月14日、名塚隊長、星野龍史、品川幸彦、江

塚進介、宮崎勉（49）、馬場保男（48）、岩崎栄（37）の7人が頂上に立った。

佐藤光由隊長（36）率いるB隊は、他隊の事故者救出に協力していた事もあり、予定が遅れていたが、7月16日、佐藤隊長と岩崎洋（37）福本誠志（23）、梁瀬佐市（40）、吉田秀樹（44）、吉田文江（41）の5隊員がブロード・ピーク（8,051m）に登頂した。なお、吉田文江さんは、長尾妙子さんや遠藤由加さんと並ぶ日本人女性八千メートル峰最多登頂（4座）者となった。

後藤文明（32）隊長率いるC隊は、7月8日、後藤隊長と尾形好雄（49）隊員がガッシャーブルムII峰に登頂した。また、C隊の綿貫剛（25）、田島崇行（20）両隊員は、名塚隊長率いるA隊に加わり、14日にガッシャーブルムII峰に登頂、田島隊員は八千メートル峰日本人最年少登頂者となった（23ページ参照）。

同隊は、それぞれの隊が二座登頂を目指しており、既にガッシャーブルムI、II両峰に登頂したA隊を除くB、C隊は登山継続中である。

ガッシャーブルムI単独登頂

ガッシャーブルムI峰（8,068m）を目指していた岩峯登高会の木村功二郎（28）氏が、7月9日、同峰に単独登頂した。

また、JFMA隊（常陸民生隊長）の倉嶋博之（33）、佐野友康（25）2隊員が7月16日、登頂した。

中・パ合同隊ナンガ・パルバットに登頂

パキスタン山岳会と中国のチベット登山協会の合同登山隊が、6月15日11時45分、ナンガ・パルバット（8,125m）にディアミール壁から登頂した。登頂したのは中国側（チベット人）6人とパキスタン側2人の計8人。中国国籍者の同峰登頂は初めてである。（ヒマヴァンタ7月号）

《中国》

ダライ・ラマ台湾に代表事務所

7月20日付の台湾紙、自由時報によると、台湾の仏教団体である中国仏教教会の浄心・理事長は

19日、チベット仏教の最高指導者ダライ・ラマ十四世の台湾駐在代表事務所が9月中にも台北に設置されると述べた。（7.21.朝日新聞）

インフォメーション

インド政府観光局で電話案内サービス開始

インド政府観光局では、この度ボイス・アシスタンス・サービスを開始した。英語と日本語によるものだが、情報内容は以下の通りである。

- 政府観光局の住所、最寄り駅からの順路、開局時間及び休業日について。
- 観光ヴィザの取得方法について
- 資料請求について（一般、旅行会社別）。
- 予防接種荷について。
- 通貨・両替について。

マハラシュトラ州遺跡見学日のお知らせ

下記の遺跡に関しては、毎週月曜日は見学できないので、登山やトレッキング後の見学を予定している場合には注意のこと。

- エローラ石窟（アルランガバート地域）
- エレファンタ石窟

ヒマラヤから

バルトロ三山便り

アッサラーム・アレイコム!!

寒い日が続いております。如何お過しでしょうか。この手紙が着く頃には暑中見舞いのはずですが、もう4日も雪が降り続いて毎日BCでうだうだしております。ブロード隊はC3までのルート仕事を終えてC4用のテント、ロープ、食料もC2に上げてあるので、次に上がればそのままアタックなのですが、今日も雪が降っており、止んでからも3日は動けそうにないので、まだしばらくかかりそうです。 7.1.群馬岳連 岩崎 洋

バルトロ三山便り

アッサラーム・レイコム!

皆様お元気ですかー？私はヘリコプターでスカ

ルドに『振出しに戻る』となってしまいました。

ネパールでの下痢から始まり、キャラバン中も体調を崩したままBC入りしてしまい、高所順応が上手くいかず、顔がパンパンになったまま、今回のやり直しとなってしまいました。情けない…。

いわゆる自己管理の悪さが原因です。とにかく、尾形、後藤両氏には申し訳が立ちませんでした。しばらくスカルドでリフレッシュして2度目のブロード・ピークを目指してキャラバンを始めます。岩崎（洋）さんは酒を抱えてガンバッテます。

静岡のブロード・ピーク、松岡サンのレディス・フィンガー、残念です。

他のメンバーは皆元気にやっています。7月の10日前後、1つ目は終わる予定です。ガッシャーのBCは数え切れない数の隊と人数でひしめき合っています。

7月2日スカルドにて 群馬岳連隊 野沢井

チャルン便り

情報いろいろありがとうございました。

6月25日にデリーに入りました。先発の2名は6月24日にレーに飛び、マナリで高所ポーター2名と合流、チャルン峰のBC地点の偵察です。

7月1日には隊員全員、ダージリン・シェルパともレーで合流します。尾形さんとカンチへ行ったサンゲ・シェルパもいます。

リエゾン・オフィサーはナンダ・デヴィに登った事もある28才の好青年です。うまく付き合えそうです。こちら側は年寄も多く、のんびり登ります。順調にルートが伸びれば、7月15日頃には登頂出来るかも知れません。

マナリの森田さんにお世話になりました。

6月27日インペリアル・Hにて

JAC 東海支部 鈴木常夫

ムスターグ・アタ便り

你好！

出発に際しては、いろいろな助言、援助をしていただき、ありがとうございました。

無事7月16日夕刻、雨上がりの北京に着きました。連日35度とのことです。北京では交流部副部

長の趙建軍さんの出迎えを受け、前門飯店に泊まりました。部屋の雨漏り（?）、クーラーの故障と騒ぎましたが…。

今日はウルムチへ向かいます。7月17日

HAJMスターグ・アタ女性隊 市川春代

スキルブルム便り

暑中お見舞い申し上げます。

出発に際しましては大変お世話になりました。イスラマバードでの準備を終わって、いよいよ7月15日にスカルドへ向けて陸路出発いたします。ありがとうございました。

神奈川ヒマラヤ登山隊1997

30周年資金協力者ご芳名

10口（山森欣一、八木原罔明②、寺沢善信・玲子、鈴木雄一）5口（遠藤克昭、宮崎久夫、酒井国光、中岡久、渡辺齊、土谷正伸）3口（山倉洋一、森山安次、天城敏彦、片岡邦夫、阿部淳、匿名2名）2口（関根幸次、青木正樹、寺田捨巳）1口（斎藤繁、日南長二郎、大須賀春一、秋山和彦、高田英明、奥村博、野口道雄、沢田千代、森秀子、丸山隆司、沢田幸子、安部誠、西本武志、古川英勝、谷田川武、堤信夫・久美、野上国広、松村隆雄、坂上利明、菅原愛里、松島静吾、匿名）

1997年 7月22日現在 総計99名 2,257,000円

お詫び並びに訂正

「ヒマラヤ」No.308号2ページの表題が「ギャ初登頂に意義あり」となっておりましたが、正しくは「……異議あり」です。ここに訂正しお詫び致します。

東京集会のお知らせ

日時 8月25日（月）午後7時～
場所 HAJルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

54歳からのヒマラヤ行

— 素人のヒマラヤ登山10年記 —

江尻 健二

日本ヒマラヤ協会H A J東京集会（毎月1回）の折、山森専務理事に、私の名刺に「日本ヒマラヤ協会・会員」と入れてよいかと問うたところ“勿論いいですよ”と“では、「BC派＝ベースキャンプ派」と入れるのはどうでしょう？”との問いには、“NO”の答えが返ってきました。

◆H A Jへ入会する

私がH A Jに入ったのは、1987年なので今年で10年になります。

私の勤務していた日中学院には^{アルチュウカイ}歩中会（歩きながらも中国を学ぶ会……深田久弥氏子息等が創った）という登山同行会があり、ある時、山先輩の遠藤京子さんが入会してきました。彼女は早速、日中学院で日本語を学ぶ中国人留学生を富士山に登らせようと、登山靴、雨具、ザック等を調達し、留学生を見事登頂させることができ、それは今日までつづけられております。

その内、歩中会で雲南の玉龍雪山に登ろうとの計画がもちあがり、学院長を会長として、派遣体制づくりがすすめられました。しかし、会には日本での冬山経験者すら皆無に近く、計画は流れてしまいました

◆ゲニ（6,204m）へ

その年、H A Jでは日中国交正常化15周年を記念し、中国、四川省の奥深くにある未踏の山、格聶峰（ゲニ）への隊員を募集していました。その年、私は勤続25年で長期休暇をとることができたので、遠藤、柴崎両同学と共に応募することになりました。参加は認められたものの、私は冬山は全くの未経験なので、山森さんからはクレバスに落ちるのがせいぜいだから、ピッケル、アイゼンはず、BCから上には行かぬこと、と釘をさされての参加になりました。

ベテラン飛田隊長のもと、隊としては残念なが

ら登頂は果たせませんでした（翌年初登頂）日本人として初めての現地入り、そして4,000mの高地に咲くエーデルワイス、スマレ、ノビレダイオー等をふみわけながら、トレッキングを楽しむと共に、高所順応への人体の不思議さも、じかに体験することができました。それだけでなく、中国革命を左右した蘆定橋、康定、二郎山等をまのあたりにすることができ、中国の山々にすっかり魅せられてしまいました。

◆シュエ・バオディン（5,588m）へ

ついで、勤続30年の休みのとれた1991年、私は58歳、山はやはり中国四川省の雪宝頂（シュエ・バオディン）私の歳のダブルでげんもよく、隊長は全員登頂が得手のベテラン酒井さん。赤いケシ、ブルーポピー、現地の人々との交流等を楽しみながら、4,200mのBCに着きました。

高初順応のため、更に100m程上の湖へ、先輩のゆっくりとしたかなペースに、呼吸の乱れもなく、汗もかかずで、高山の歩き方を学ばせていただきました。その後は、ザイル切り、石だらけの河原でのトイレ造り等に汗を流しました。

偵察隊が帰り、いよいよ明日から行動というのに、ウイスキーをちとのみすぎ（そういえば他の



▲ナムチェバザールからサガルマータ、ローツェを初看登

人は余りのまなかつた) がたたったのか、翌朝は胸が苦しく、その日の行動は休ませてと申しでました。隊長、秘書長、医療担当の協議の結果、酸素を吸わせて即下山の命令。いつときは、これで我が人生もおわりかといったことも胸をよぎりました。

山森さん親子を道ずれに、下の街松藩まで11時間余の馬の旅を楽しむ(下山がはじまるとまもなく嘘のように楽になったので) ことができましたが、三人のお尻には可愛いコブが計6個できておりました。お陰で中国奥地での一週間の滞在で、街の詳細図がかける程で、街の人々とも親しむことができました。

◆ユイチュ(6,179m)を断念する

こんな迷惑をかけたのを忘れたかの如く、1994年には、中国青海省の玉珠峰に申しこんでしまいました。隊長は同じ酒井さん。しかし、日がたつにつれ、先回多くの人々に迷惑をかけたこと、又、今回のBCは未経験の5,000m、多くの人々に相談し、迷いに迷ったあげく、谷川岳山麓でのテントの内で、皆に詫言棄権しました。この隊は見事

全員登頂を果たしたので、私のとった措置はよかったと思ひ、それからはヒマラヤでの登頂を夢みることはやめました。

◆新たなる夢を求めて

しかし、ヒマラヤへの魅力は断ちがたく、この年の暮、トレッキングのツアーに加わり、サガルマータ、ローツェ等々の姿に接し、又、ひとあじちがうヒマラヤの喜びを見出すことができました。

この10年間に、中国2回、ネパール3回、パキスタン2回と、様々なかたちでのヒマラヤを楽しませていただきました。雪宝頂以降山に入ったら、断酒するといったオマケまでつきました。

体力、時間、お金のいずれのひとつが欠けても、ヒマラヤの楽しみは得られません。最低エレベーター、エスカレーターを利用しない、農作業で汗を流すなどして、次はどこへなどと夢をみております。

HAJの皆さん、新しい世界を拓ける機会を与えてくださったことに心から感謝しております。今後共、御指導のほどよろしく願いいたします。

1997年、64歳の夏

東京新聞の本

山の情報誌 岳人



毎月15日発売(日・祝日の場合は前日) 定価670円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は通常号116円、特大号124円です。年間購読料は8,480円で送料は当社負担です。お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

97年	第1特集	特別企画
★1月号	日本の雪山大作戦	南米インカ・トレイルに行く
2月号	富士見十三州の山	春のフンザとバルトロ氷河
★3月号	山スキー大滑降	ネパールの夢のトレッキング
4月号	アルプスの雪稜	初夏のロッキー特選コース
★5月号	花と森の山旅	中部の山岳会と奥美濃の山
★6月号	私の花の名山	創刊50年 世界のアルピニストたち
★7月号	今から間に合う海外の山	仙台のクラブ、東北の沢に行く
8月号	みちのくの山と沢	屋久島の緑深い峰々と人
9月号	修験の山は名山	山の達人と訪ねる秋の北海道
★10月号	紅葉の山、尾瀬と南会津	撮影クラブと秋の大峰山脈へ
11月号	晩秋、湯けむり紀行	フリークライミング天国・岡山
12月号	身を守る雪山技術	冬の奥秩父に生きる山人たち

(★は 特大号となります)

東京新聞出版局(中日新聞) 千108 東京都港区港南2-3-13 ☎(03)3740-2674
書店で発売中。中日新聞販売店でも取りつぎます。

中国領ヒマラヤの登れる主な山々

(1997. 7. 8 現在)

(西蔵自治区) 七千メートル以上

	一般的な山名	標高	北緯	東経	中国名	中国名	
1	チョモランマ	Chomolungma	8,848m	27.59	86.55	珠穆朗瑪	Qomolangma
2	ローツェ	Lhotse	8,516m	27.58	86.56	洛子	Lhoze
3	マカルー	Makalu	8,463m	27.53	87.05	馬卡魯	Makaru
4	ローツェ・シャル	Lhotse Shar	8,400m	27.57	86.56	洛子東峰	Lhoze
5	チョー・オユ	Cho Oyu	8,201m	28.06	86.40	卓奥友	Qowowuyag
6	シシヤパンマ	Shishapangma	8,027m	28.21	85.47	希夏邦馬	Xixabangma
7	ギャンチュン・カン	Gyachung Kang	7,952m	28.06	86.45	格仲康	Gezheng Kang
8	ゴジュンバ・カン	Ngozumba Kang	7,882m	28.06	86.43		
9	チョモ・レンゾ	Chomo Lonzo	7,790m	27.56	87.06	拉瑪朗卓	Lamalanzuo
10	モラメンチン	Molamenqin	7,703m	28.21	85.49	摩拉門青	Maramenchin
11	ナムナニ	Namunani	7,694m	30.50	81.30	納木那尼	Naimananyi
12	チャンツェ	Changtse	7,553m	28.01	86.55	章子	Zhangzi
13	クーラ・カンリ	Kula Kangri	7,538m	28.13	90.33	庫拉崗日	Gulha Kangri
14	ブンパ・リ	Pungpa Ri	7,447m	28.21	85.47		
15	ヤンラ・カンリ	Yangra Kangri	7,429m	28.24	85.08	央然康日	Yangra Kangri
16	ラブチェ・カン	Lapche Kang	7,367m	28.07	86.06	拉布吉康	Labgye Kang
17	エボカンジャロ・リ	Yebokanjiale Ri	7,365m			野博康加勒日	
18	チョー・アウイ	Cho Aui	7,354m	28.04	86.37	喬烏衣	Qowoyat
19	スークァン・リ	Sigugag Ri	7,308m	28.0	87.0	四光峰	Siguang
20	カンペンチン	Kangpencgin	7,299m	28.33	85.33	康彭欽	Kangponkin
21	ギャラ・ペリ	Gyala Peri	7,294m	29.19	94.59	加拉白里	Gyala Bairi
22	ポーロン・リ	Porong Ri	7,292m	28.24	85.43	西峰	Xifeng
23	カルタプー	Khartaphu	7,227m	28.04	86.59	卡達普	Khartaphu
24	カルジャン	Karjian	7,221m	28.0	91.0	卡熱疆	Karejing
25	ランタン・リ	Langtang Ri	7,205m	28.23	85.41	蘭塔日	Lantari
26	ニンチン・カンサ	Ningzingzonka	7,206m	25.55	90.15	寧金抗沙	Nojinkansang
27	メンルンツェ	Menlungtse	7,175m	27.58	86.26	喬格茹	Qogru
28	ニェンチェンタンラ	Nianqingtanggula	7,162m	30.30	90.30	念青唐古拉	Yainqentanglha
29	プモ・リ	Pumo Ri	7,161m	28.01	86.50	普莫里	Pumo Rize
30	ガウリサンカール	Gaurisankar	7,134m	25.58	86.20	赤仁瑪	Chirenma
31	ロボ	Lubo	7,095m	29.55	84.40	罗波崗日	Loinbo Kangri
32	リシン		7,071m	28.0	87.0	立新	Lixin
33	カルタ・チャンリ	Kharta Changri	7,056m	28.07	87.00	卡尔達章格里	Kaerdazhangge
34	チョブカン		7,048m	29.9	90.0	穷母崗日	Qungmoganze
35	ラトナ・チュリ	Ratana Chuli	7,035m	28.52	84.22	拉熱德納	Radena Chuli
36	シャン・ドン		7,018m			向東	Xiandong

(新疆・青海) 六千メートル以上

	一般的な山名	標高	北緯	東経	中国名	
1	チョゴリ	Chogori	8,611m	35.52	76.30	喬戈里 Qogir
2	ガッシャーブルム I	Gasherbrum I	8,080m	35.45	76.39	加舒尔布鲁木 Gasherbrum
3	ブロード・ピーク	Broad Peak	8,051m	35.48	76.34	布洛阿特 Broad
4	ガッシャーブルム II	Gasherbrum II	8,035m	35.45	76.39	加舒尔布鲁木 Gasherbrum
5	コングール	Kongur	7,649m	38.40	75.20	公格尔 Kongur
6	ムズターグ・アタ	Muztag Ata	7,546m	38.15	75.10	慕士塔格 Muztagata
7	スキャン・カンリ	Skyan Kangri	7,544m	33.54	76.33	斯克洋坎里 Sikeyang Kanli
8	コングール・チュビエ	Kongur Tiubie	7,530m	38.40	75.15	公路尔九别 Kongur Tobe
9	テラム・カンリ	Teram Kangri	7,441m	35.34	77.05	特拉木坎力 Teram Kangri
10	トムール	Tuomuier	7,435m	42.00	80.10	托木尔 Tomur
11	シバンドゥ	Sipande	7,315m	36.0	77.0	斯坎德 Sipande
12	クラウン	Crown	7,295m	36.06	76.11	皇冠 Huangguan
13	アプサラサス	Apsarasas	7,243m	35.32	77.09	
14	無名峰		7,167m	新疆/チベット		
15	チリン	Chirin	7,038m	36.0	77.0	麒麟 Qilin
16	ハン・テングリ	Khan Tengri	6,995m	42.10	80.00	汗騰格里 Hantengri
17	ウルグ・ムズターグ	Ulugh Muztagh	6,973m	36.28	87.27	木孜塔格 Muztag
18	●チオン・ムズターグ	Chion Muztagh	6,962m	35.55	82.18	琼木孜塔格 Qong Muztag
19	●タイラン	Tailan	6,943m	トムール北東		台蘭 Tailan
20	無名峰		6,903m	7,167m峰の東		
21	シンチン	Xinqing	6,860m	36.01	90.52	布喀達坂 Buka Daban
22	●トガイベリチ		6,859m	トムール北東		吐盖别里齐 Tugaibelychi
23	●無名峰		6,858m	カラコルム		
24	●〃		6,820m	チオンの西		
25	●〃		6,808m	カラコルム		
26	●アク・ターグ		6,748m	36.7	84.6	阿克塔格 Ak Tag
27	ハーン・ヤイリク		6,744m			
28	●チュエレボス		6,731m	トムール北東		却勒博斯 Chuelebos
29	コクセル	Koksel	6,705m	コングール南		
30	チャクラギル	Chakragil	6,678m	38.52	75.09	
31	タンジュエ		6,644m			團結峰 Tuanjie
32	ムズターグ	Muztagh	6,638m	35.57	80.13	慕士山 Muztag
33	シュエレン		6,627m	42.0	80.0	雪蓮峰 Xuelizn
34	グランタンドン		6,621m	33.5	91.0	各拉丹冬 Geladaindong
35	チョルパンリク・ムスターグ		6,524m	35.50	80.05	
36	ギシリク・ターク		6,488m			庫台克力克 Kutaikelike
37	カシカール		6,342m	トムールの南		科其喀尔 Koxkar
38	アムネマチン	Amne Machin	6,282m	34.30	99.30	瑪脚崗日 Maqen Gangri
39	ユイチュ	Yuzhu	6,179m	35.39	94.15	玉珠 Yuzhu

(四川・雲南) 六千メートル以上

	一般的な山名	標高	北緯	東経	中国名		
1	ミニヤ・コンカ	Minya Konka	7,556m	29.36	101.52	貢嘎山	Gongga
2	ソンヤツツェン	Sunyixian	6,886m	29.39	101.35	中山峰	Zhongshan
3	●リュウシャン (下からは不見)	Long	6,684m	コンカの南東		龍山	
4	エドガー	Edgar	6,618m	29.45	101.54		
5	リウチ・コンカ	Riuchi Konka	6,540m	29.47	101.52	嘉子峰	Jiazi
6	チュウシャン	Qyu	6,468m	コンカの南東		朱山	
7	タイシャン	Tai	6,410m	"		戴山	
8	ダッドメイン	Daddomain	6,380m	29.41	101.50	達多漫因	
9	レッドメイン	Reddomain	6,112m	29.45	101.50	勒多漫因	Leduo Manyin
10	●無名峰		6,079m	コンカの南			
11	●無名峰		6,070m	コンカの北			
12	●シャラリ		6,032m	28.4	100.3	先熱日	Xianre Ri
13	スークーニャン		6,250m	31.1	102.9	四姑娘山	Siguniang
14	ゲニ		6,204m	29.8	99.8	格聶	Genyen
15	チェルー		6,168m	31.8	99.1	雀儿山	Cholu
16	●ヤンモーロン		6,060m	バタンの北東		央莫竜	Yulong
17	●メイリー・シュエシャン		6,740m	28.4	98.6	梅里雪山	Moirigkawagarbo
18	●メンジボ		6,054m	メイリー南東		面茨姆	

八千メートル峰最年少サミッター誕生

群馬県山岳連盟隊に参加していた田島崇行隊員は、1997年7月14日カラコルム山系のガッシャーブルムⅡ(8,035m)の登頂に成功した。時に20歳5ヶ月と5日。これによって田島は、日本の八千メートル峰サミッターの年少記録を塗り変えたことになる。これまでの記録は、今から15年前の82年10月10日に小西浩文が、シシャパンマに登頂して達成した20歳6ヶ月と25日とされていたが、これには少々説明が必要だ。小西の参加した82年当時のシシャパンマ主峰は標高8,012mであり、その北西側に7,999mのピークがあり、このピークは北峰と呼ばれていた。当時、シシャパンマ登頂と言えば、その主峰を指していると思っていた。したがって誰しもが、小西の参加した登山隊の登頂者の全てが主峰に登頂したものと思っていたが、最近になって何人かの登頂者に確認したところ、彼等が登頂したのは、当時の7,999mのピークであることが分かった。つまり82年の時点では、彼

等が主峰に登っていない限りは八千メートル峰サミッターではなかったのである。

ところが、87年になって中国からシシャパンマの新しい地図が発行されたが、それによると主峰には8,027mの標高が与えられ、その北西、直線距離にして約350mの位置にある、かつての7,999mのピークが8,008mとなり、さらにこのピークの西側、直線距離にして約250m地点に7,966mのピークが表示されたのである。このため現在では、8,008mピークを中央峰、7,966mピークを北峰と呼ぶようになっているのである。このような情勢になると、地形のことも手伝って、中央峰に登頂する登山者が多くなったのである。このような事情を勘案すると、年少記録の変遷は、マナスル登頂の日下田実が[56年～71年]、同じくマナスルの田中基喜が[71年～80年]、ガッシャーブルムⅡの今田賢二が[80年～87年]、小西が[87年～97年]となるのである。(記:山森 欣一)

■ 寸 感 ■

カラコラムの奥深いガッシャブルムのBCから電話が入った。BC付近から21年前の登山隊員の遺体が発見されたので、関係者に移葬の諒解を得て欲しいとのことであった。「Bart」No15ではエヴェレストに放置された遺体の特集が載っていた。いずれも考えさせられる事である。(山森)

事務局日誌 (7月)

- 3日(水) 元岳人編集長、西山暉大さんの門出を祝う会(於、東京 山森、寺沢)
ムスターグ・アタ隊ビザ取得
- 4日(木) 労山合同社行会&リズム峰報告会(於、エミール 山森、寺沢)
スキルブルム峰社行会(於、横浜、中川)
- 9日(水) ヒマラヤ309号発送
- 11日(金) ニンチン・カンサ隊ビザ取得
- 12日(土) ニンチン・カンサ隊家族会&合同社行会(於、かんぼヘルスプラザ東京)

- 16日(水) 福島正明氏「中高年登山なんでも百科」出版記念会(山森)
ムスターグ・アタ隊出発
- 19日(土) 明治大学マナスル&アンナプルナ登山隊社行会(山森、中川)
- 20日(日) ニンチン・カンサ隊出発
山森専務理事ラサへ出発
- 26日(土) 山森専務理事帰国
- 28日(月) 東京集会(5名)

ヒマラヤ No.310 (9月号)

平成9年8月10日印刷 9年9月1日発行
 発行人 稲田 定重
 編集人 山森 欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高圧バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高み



個人・グループの手配旅行、航空券の取り扱い専門デスク



キャラバンデスク TEL03-3237-8384

～地球の果てまであなたのキャラバンのお手伝い～

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のバイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)1391(代表)

キャラバンデスク 〒101 東京都千代田区神田神保町2-3-1岩波書店アネックス5階 ☎03(3237)8384(代表)

大阪営業所 〒530 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F ☎06(367)1391(代表)

カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING(P) Ltd. P.O. BOX3017 KATHMANDU, NEPAL ☎221707

運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェア館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004